



Title	F. ウェーランド Elements of Moral Science と阿部泰蔵訳『修身論』：明治初期の翻訳教科書をめぐって
Author(s)	Millan Martin, Alberto
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59150
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	ミヤン マルティン アルベルト Millan Martin Alberto
博士の専攻分野の名称	博士（日本語・日本文化）
学位記番号	第 24875 号
学位授与年月日	平成23年9月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語社会専攻
学位論文名	F・ウェーランド <i>Elements of Moral Science</i> と阿部泰蔵訳『修身論』 —明治初期の翻訳教科書をめぐって—
論文審査委員	(主査) 日本語日本文化教育センター教授 嶋本 隆光 (副査) 教授 堀江 新二 日本語日本文化教育センター教授 加藤 均 法学研究科教授 森藤 一史 日本語日本文化教育センター准教授 五之治昌比呂

論文内容の要旨

明治初期の日本では、米国のバプテスト派牧師F・ウェーランド（1796—1865）の著*Elements of Moral Science*縮約版（1835年）を翻訳または翻案した本が何種類か出版された。ウェーランドは、学術都市プロビデンスのブラウン大学で学長を務めていたので、当時すべての教科の上位と認められる「道徳哲学」の科目を担当していた。その授業で自分の教科書を使用する志を持ったことが、倫理の理論と実践を論じる*Elements of Moral Science*を著した理由である。同書の前編は、キリスト教の教義に基づく道徳法を扱い、道徳的行為を規定する最大の基準として、因果関係の自然法に類似する道徳法、人間だけが持つ良心、および権威ある聖書の三つを挙げている。後編は、平等的・相互的な人間関係、個人の自由、所有と商取引、真実性、親子の義務と権利、政治の本質および形態、慈悲などを扱い、本書の主要部分である。さらに、後編で述べられた倫理思想を広めることが*Elements of Moral Science*の究極目的であった。ちなみに、その思想は、ウェーランドの最も影響力を持った教科書*Elements of Political Economy*（1837年）の基礎となった。倫理と経済を論じるウェーランドの二冊は、現在は忘れ去られたものの、当時は広く読まれ、南北戦争前にアメリカ民主主義と資本主義の発展に大きな影響を与えたことは確かである。

ウェーランドのこの二書が日本に導入されるのは、明治維新後の文明開化と近代化の時代である。「英学」学校などで教材として使われるほか、欧米の民主主義的価値観や政治経済システムを知るための手段と考えられた。福沢諭吉は、慶應義塾で西洋文明を講義するために両書を用いたが、特に*Elements of Moral Science*に感銘を受け、その思想を『学問のすゝめ』に取り入れた。ほぼ同時の1871年に新しく設置された文部省は、翌年に近代的な教育制度を定める「学制」を公布したときに、小学教育の二学年前期で*Elements of Moral Science*縮約版の日本語版を「修身」の標準教科書として推薦した。そこで、文部省は、当時編輯寮に勤めていた福沢諭吉の門下生・阿部泰蔵（1849—1924）に翻訳教科書『修身論』（三巻）の作成を担当させた。1873年2月にキリシタン禁制の高札が撤去されると、ようやく本書は刊行された。1874年1月のことである。やがて『修身論』は各地域に広範に普及し、小学校で使用されるだけでなく、一般の読み物としても広く読まれた。しかしながら、欧米の文明国の制度に倣って誕生した「学制」は1879年に廃止された。さらに、1880年代になると、自由民権運動に対する反動として伝統的な儒教的倫理の復古が促進され始めた。これらによって、ウェーランドの名と共に『修身論』とその原著が急速に歴史から姿を消されてしまう。

学制期（1872-79年）にウェーランドの両書は大人気を得たので、同時期に日本で「ウェーランド・ブーム」が起こったと言われている。*Elements of Moral Science*および*Elements of Political Economy*が福沢諭吉や明治日本に与えた影響については、先行研究が既に存在する。さらに、約十種類が現存する*Elements of Moral Science*縮約版の翻訳書は、先行研究において言及されており、阿部泰蔵訳『修身論』の顕著な特徴として、前編の終わりならびに後編の始めの教章を訳しなかった事実が紹介されている。聖書の権威や宗教的な義務を扱う教章であるから、削除の決定的な理由としてキリスト教禁教のあることが、先行研究の中で指摘されてきた。ところが、筆者は阿部がキリスト教関係の箇所を翻訳しなかったもうひとつの理由があると考えられる。それは、阿部が独自の翻訳方針を打ち立てていた事実である。

それを検証するために、本論では、阿部泰蔵が訳出した章節の中においては、キリスト教関連の内容をどのように訳しているかを実証した。阿部泰蔵訳をウェーランドの原著ならびに山本義俊訳『泰西 修身論』（1873年6月）と平野久太郎訳『米人准蘭徳著 修身学』（1875年6月）との対照比較を行うことによって、『修身論』（1874年1月）の特徴が対照的に見え、より明瞭に把握することができた。なお、本論の比較分析調査でわかった主要な点は、次の通りである。

まず、山本と平野の翻訳書は、両方ともキリスト教を紹介する翻訳書である。平野は、神道などの用語を使ってキリスト教関連用語の訳を試み、逐語的な翻訳を行っている。理解不能な直訳が多すぎて、キリスト教を知らない日本人にとって非常にわかりにくい翻訳書であろう。一方、山本は、主に仏教の用語を借りて、意味が難解な箇所を簡単な解説を補足している。たまには仏教などと比較対照をしながらキリスト教を紹介しており、不正確な情報を伝えることもある。日本人の持っている知識を利用してキリスト教を厳密かつ丁寧に紹介しようとする意図が窺えるが、あまり成功していない。例えば、キリスト教において積極的である黄金律を、論語の言葉を借りて消極的に訳出してしまうことがある。神やキリストに関する神学的な理論の訳も、正確とは言えない。

次に、これまで注目されていなかった阿部泰蔵訳『修身論』の特徴と、原著との内容上の関係は、以下のように明らかにした。

阿部の教科書は、平野と山本のと違って、キリスト教に基づく倫理を教えているとはいえ、キリスト教の本ではなくなっている。阿部は、数多の用語や表現を削除または翻案し、儒教風にまたは一般的に日本風に解釈できる教科書を作成した。例えば、黄金律を訳すために論語の言葉を借りているが、正しく積極的に表現している。阿部は、善悪の因果関係などという古今東西の共通点を巧みに翻訳しているが、神学的な理論をはじめ日本の社会に合わない根本的に異質な要素を訳出していないのである。

キリスト教関連のキーワードの翻訳は、曖昧な表現を使う傾向にある。例えば、イエス・キリストと聖書への言及を訳出する場合、それぞれ「賢人」（たまには「先賢」）、「経典」（たまには「古書」）と表現している。ウェーランドが作品中に挙げる例話や実話においては、阿部は聖書上の人物を削除または翻案をする一方、歴史上の人物をちゃんと訳出する強い傾向にある。割注で補足説明している場合もあり、西洋事情に関する阿部泰蔵の関心が窺える。

『修身論』では、聖書は道徳的な行為をなすための最大の基準として登場しない。こうして、ウェーランドの原著では人間が神から授かった善悪の区別の基準は、因果関係の自然法、良心と聖書の三つがあるのに対して、『修身論』では善悪の因果応報と「本心（＝良心）」の二つしかない。前者は、善行が幸福や満足という善果をもたらし、悪行が後悔や心配という悪果をもたらすという法則で、仏教圏の日本では理解されたであろう。後者は、齟齬する点もあるが、少なくとも儒教風に解釈できる。さらに、阿部の言う「経典」は、聖書や論語など権威ある書物ではなく、単なる参考のために用いられている。しかし、『修身論』で展開されている論点は、特定の権威ある書物の言葉によって裏付けられなくても、ウェーランドが文中に挙げる一定の普遍性を持つ日常生活の具体的な例示を根拠としている。

もうひとつの問題点は、キリスト教の神を意味する様々な表現をすべて「天」と訳した点である。阿部泰蔵訳『修身論』における「天」は、キリスト教の神の性質を幾分帯びながら、儒教・仏教・神道・民間信仰などにおける日本的な「天」の様々な特徴を含み、いわば世界共通の漠然とした「天」であると考えられる。本論ではこの「天」の意味を検証し、判明した特徴を整理した。柳父章によれば、明治初期の啓蒙思想家が使っていた「天」は、統一した社会のシンボルであり、古い時代と断絶しないまま新しい近代時代に繋がる役割を果たしていた。従って、阿部はこの「天」の使用に訴えた点で、

日本の読者にとって受け入れやすい教科書を作成したと筆者は考える。

本論の結論は次の通りである。阿部が、キリスト教の教義を扱う内容を削除または翻案したのは、後編で扱われる実践倫理の導入を優先したからである。こうして、特に前編を翻訳するに当たって当時の日本の実情を考えて、受け入れやすい教科書を作成しようとした。さらに、倫理教科書は、対象読者の行動を指導しようとする点で、客観的な情報の伝達を目的とする歴史や科学の教科書とは明らかに違う。そこで、阿部泰蔵がなした翻訳を正しく評価するために、機能主義的翻訳の視点を持たなければならない。

阿部泰蔵が行った翻訳は、意図的に原著者の意図および神学的なスタンスから乖離しているにも拘わらず、日本の読者に抵抗感をあまり持たせず、原著の究極目的である実践倫理を日本に広く普及させることができた点で、大成功を収めたのであろう。

論文審査の結果の要旨

候補者の博士論文『F. ウェーランド *Elements of Moral Science* と阿部泰蔵『修身論』—明治初期の翻訳教科書をめぐって—』は、外来文化・思想の受け入れに本腰を入れていた明治維新政府が採用した本邦最初の教育政策を導入した時期、いわゆる「学制」期（1872-79）における翻訳ブームを背景に出版された翻訳書、阿部泰蔵訳『修身論』を考察の対象としている。阿部は福澤諭吉の弟子であり、明治生命保険会社の創設者として知られている。本書の原著者ウェーランドについては、彼の著作から福澤が多大な影響を受けたことについて、すでに精緻な先行研究がある。ただ、福澤が影響を受けた親版 *Elements of Moral Science* の縮刷版については、わずかの言及は見られるものの、本格的な研究は全くなされていないのが実情である。特にウェーランドの著作の思想的核部分である宗教・倫理の観点からの分析は完全に放置されてきた。

候補者の研究の優れている点は、縮刷版について、現存するおよそ10種類の翻訳または抄訳の中から代表的翻訳3点を選び、それらの特徴を詳細に比較検討しながらそれぞれの翻訳の特徴を明らかにし、その結果、阿部訳が最も広汎に受容された理由を明らかにした点である。その3種類の翻訳とは、阿部『修身論』、山本義俊『泰西 修身論』、平野久太郎『米人准蘭徳著 修身学』である。山本の訳は日本人に不案内なキリスト教の内容を丁寧に説明するために、原文にない解説を多々付け加える傾向がある。たとえば、イエスキリストの復活を説明するために仏教の輪廻転生を用いて説明する。このため、反ってキリスト教そのものの説明が不明瞭になり、誤解の原因となっている。一方、平野の訳は、いわゆる直訳調であって、一字一句丁寧に翻訳しているものの、非常に生硬な印象があり、日本語として意味が明らかでない場合が多い。これらの訳に対して、阿部の『修身論』は、当時の日本の現状に配慮して、キリスト教の教えをあからさまに出すことを控えることはもちろんのこと、キリスト教的「god」など誤解を招きやすい語を、ある意味でどのようににも適応・解釈できる「天」などの語を用いることによって、伝統的に日本人の間で受け入れられてきた用語を用い、しかも特定の思想信条を連想させない工夫がなされている。さらに、その文体は全体としての意味を考慮しているため、流麗で、大変読みやすいものである。ただし、この目的を達成するために、原著の原文を恣意的に省略するなど、相当に大胆な翻訳作業を行っていることの問題点も指摘されている。

候補者は以上の点を証明するために、上記三者の翻訳を、「ゴッド」、「聖書」、「良心」などのキーワードについて、詳細かつ精緻に比較検討を行った。その結果、阿部の翻訳がもっとも当時の日本の実情に合ったものであり、彼の作品が広範に流布した理由をこの点に求めている。

以上の分析・検討はこれまでまったく行われたことのない優れた業績であり、この点を高く評価して、論文審査担当者は全員一致で候補者の論文は日本語・日本文化の博士号にふさわしいとの結論に達した。